

「後集団」概念と汎神論（広義の神道）の射程 その1

—コミュニティの本質と《社会統合原理》の根本を問う、権藤成卿の
「社稷」と「ヲシテ文献（ホツマツタエ他）」の普遍性を読み解く—

森田成男（社会・経済システム学会会員）

はじめに

本稿のメインテーマは「コミュニティの本質とは何か」である。当然にその総合的考察は、学際的な多様な分野からのアプローチで構成される。譬えて云えば、「コミュニティ」を成り立たせる個別の木だけでなく、木々の全体的連関に焦点を当て、《全体社会のコミュニティ》という「森林の全体像」を俯瞰することと、本当の日本を知ることが執筆の動機である。

具体的には、《全体社会》が、部分の単なる総計ではなく、全体と部分との間に、また部分と部分との間に、本質的な対立・不整合な緊張の関係があること。そして、北米先住民イシの物語や、《社稷（しゃしよく）》の奥深い真理にふれながら社会人類学、現象学的社会学、古神道の思惟、国語学、書誌学などの最新の学術的知見を交え、本来的な「人間社会」の在りようの根本を鳥瞰し、次の時代の「ソーシャル・デザインの必須要件とは」を世に問う試みでもある。

現在、佐々木信綱博士からの系譜で、戦後に天理図書館へも「ホツマツタエ」などに関係する資料がもたらされている。

『ヲシテ文献（ホツマツタエ、ミカサフミ、カクのミハタ）』の大宇宙哲理、蔵内数太社会学の関心領域、空海と最澄と吉備真備の関係、最新の考古学の成果が示す一万年以上前からの縄文文明の存在、上山春平が洞察した「日本的思惟の特質」、これらが一本の線につながっている。

先行研究者たちが指摘するように、オオタタネコがヲシテ文字で朝廷に献上した『ホツマツタエ』は、皇室と日本国民の歴史が、縄文時代にまで遡ることをしっかりと教えている。

武田祐吉博士たちが指摘したように、『古事記』、『日本書紀』の成立時代において、すでに文字になっていた古記の類は、相当にあったと考えられる。歌謡にしても『柿本朝臣人麻呂歌集』のごときものは、すでに成立していたのだろう。（武田、1973a、313 - 323）

その和歌の原点である、一万行にも及ぶ五七の韻律をもつ長歌体の、神話ではなく、過去の出来事そのもののノンフィクションの叙述に近い『ホツマツタエ』などの『ヲシテ文献』が、今や私たちの眼前に存在している。従来、漢字が移入されてから文化が発生したと考えられてきたが、その通説は間違いであった。学問の進歩は、通説の訂正の歴史である。

「ヲシテ」とは、日本固有の文字のこと、あるいは文字を記した文書（染め書き）のことを云い、ヲシは教えるの語源、テは手段（道具）の意である。

中期から晩期縄文時代の『ヲシテ文献』が甦る前の、「上代特殊仮名遣い」研究の対象文献は、橋本進吉や大野晋たちが試みてきたように、推古朝の文献、記紀と万葉集、大宝二年と養老五年の戸籍帳などに限定されていた。（大矢、1918。橋本、1951。大野、1953、167 - 202）

しかし、比叡山や高野山の経蔵には、今なお、吉備真備と最澄と空海が接触し、江戸時代の

僧、溥泉たちが執筆の「原テキスト」とした、『ヲシテ文献』の原本が遺されている可能性が皆無ではないようだ。先行研究者による、1995～2001年の『古事記』と『日本書紀』と『ホツマツタエ』の三書の内容の、厳密な比較・照合により多くのことが解明できてきたのである。

『ヲシテ文献』の原テキストの奇跡的な出現により、社会的共同体とは本当は何なのか、ヤマトコトバの基本構造や和歌の起源、グローバリゼーション時代の社会編成研究の、「社会・経済システム」の深いレベルの議論にまでつながってきているのだ。

それら《社稷》という巨木の幹につながる「コミュニティの本質」と重要な課題を9章に圧縮し、本当の『日本の古典』研究が深まればと、以下の文脈で順次簡潔に述べてみた。

- 1章、豊かな縄文時代、「サピア・ウォーフの仮説」再考、「神」概念の相違
- 2章、日本と北米先住民とのつながり、『イシ 北米最後の野生インディアン』
- 3章、祝詞の原初的意味、『フトマニ』の「モトアケの図」、蔵内数太『易の社会学』
- 4章、権藤成卿の《社稷》、橋本進吉の『文字及び仮名遣の研究』と変体漢文
- 5章、蔵内数太の「現象学的社会学」と「理・法・勢・命」、「日本思想の社会観一斑」
- 6章、「家制度」再考、現象学的社会学から観た唯物論的思惟の二類型
- 7章、円空の天照大神像、「渡会行忠、渡会家行、慈遍、不干斎ハビアン、溥泉の学問」
- 8章、『懐風藻』、『万葉集』及び山崎闇斎の『風水草』、ヤマトコトバの文法をさぐる
- 9章、『ホツマツタエ』と古事記、日本書紀の内容を対照、1300年の封印を解く

ただ、この『アメリカス研究』誌第25号では、掲載文字数の規定から、第1章、3章、6章、9章のダイジェストのみ、約3分の1の分量での掲載となった。2020年現在の、各学術分野からの総合的考察の、知見の到達点の確認と検証は、同時公開の、全文掲載のヲシテ研究所の「縄文文字ヲシテを復活！」Ⅱの、wosite.jugem.jp/?eid=145 サイトにてお願いしたい。

尚、『ヲシテ文献』のことを「ホツマ文献」と言い、時代背景に無頓着な、渡来以来1300年の手あかのついた「漢字」直訳が中心の、粗雑な誤訳をする人々も出てきている。しかし、本稿では一貫して発掘・考究してきた松本善之助と池田満たちに従って、『ヲシテ文献』、「ヲシテ文字」、『ホツマツタエ』、『ミカサフミ』、『カクのミハタ（『フトマニ』など）』、及び「ヤマトコトバ」「ヲヲヤケ（公）」「トコヨクニ」「アメのミチ」で用語を統一して論述していく。「汎神論（広義の神道）」の射程のもと、「コミュニティの本質」を根本に戻って深く掘り進んでいく。

1. 豊かな縄文時代、「サピア・ウォーフの仮説」再考、「神」概念の相違

1960年代以降、放射性炭素14による年代測定が精密化し、縄文時代の文化遺跡の生活形態が、日本列島で少なくとも十万年以上にさかのぼることが、はっきりしてきた。例えば、島根県出雲スナハラ遺跡から出土の石器が、「今から七万年前から十二万年前までの間に作られたものである」など、一万年以上にわたる生活の痕跡が各地で報告されている。

青森県の三内丸山遺跡から、約5500年前の大きな定住集落跡が、富山県のヒメササハラ遺跡から4500年前のプラントオパールが、青森県のカゼハイ遺跡では3500年前の炭化したお米が発掘されている。さらに、栃木県のテラノ東遺跡では、暦の計測の施設となる、冬至と夏至を観測するための環状遺跡が発見されている。

上山春平は、1969年の『広葉樹林文化』と「思想の日本的特質」の論考において、日本の縄文時代の、高度な知的体系の存在を推論していた。縄文文化の段階で、自主的な、独自の「思惟の体系」をもっていたのではないか、ということである。（上山、1969b、8-14）

日本の広葉樹林においては、クリ、トチ、クルミ、ドングリ類他にめぐまれ、森林の下草には、クズ、ワラビ、テンナンショウ（補記：サトイモ科に属する野生の根菜類）アマドコロ、カタクリなど、野生の澱粉資源が豊富であった。当然に、トチやドングリやテンナンショウなどのアク抜きや煮炊きのため、各種の土器類は発達していく。実際に、精密測定で、今から一万五千年も前に遡る土器が、多数出土している。

「そしてかなり高度に発達した狩猟採集文化が、やがて中国の文化を受け入れるときにもフィルターのような働きをしたのではないか。（中略）四、五世紀以後の日本文化は、そういう原型が崩されない形で、高度文化に適合しえたのではないか」と上山春平は核心をつく。（上山、1969b、12 - 13。小林達、2018。革島、2019）

神社の起源をたどっていくと、縄文時代の祖先の祭祀に行き着く。奇跡的に内閣文庫に収蔵され、古代に遡る『ヲシテ文献（ホツマツタエ、ミカサフミ、カクノミハタ（フトマニなど）』に関係するので、精神的にも豊かだった、一万年以上前からはじまった縄文時代の日本独自の文明の基盤をまずここで押さえておく。

ところで、私たちは翻訳や、通訳を通じて、考えや思想をお互いに交換できていると思込んでいる。エドワード・T・ホールが『沈黙のこぼれ』（1966）や『かくれた次元』（1970）で指摘するように、言葉を補助する「しぐさ・ジェスチャー」でさえ、文化圏によってまったく正反対の意味を指すことが多い。

それぞれの民族の言語がもつ、語彙の体系と各単語そのもののニュアンスにも大きな違いがある。言語体系が違えば、厳密にみれば同じ事象の意味を見ていないという言語相対論的な「サピアとウォーフの仮説」は、未だ最終結論には至っていない。

しかも、異なった言語体系をお互いに駆使する以前に、それぞれの部族や民族集団が、パーソナリティの背景に持っている文化の独自の型、森羅万象の変化への解釈の違いが、語彙体系のすれ違いにプラスされ、複雑にモノの見方に影響している。

例外はあるが、おしなべての一般論として単純化すれば、日本を含む東洋の国々の人々は、大自然のなかに、比較的、「隠された世界」をその奥に見ることができる能力があるとされている。それに対して、欧米の人々の主流は、「見える世界」一辺倒でものごとを判断し、大自然を征服しようとする傾向が見られるようだ。

なかでも、欧米諸国の人々の「神」（GOD、絶対神、人格神）概念と、日本の一般庶民が抱く「神」（天地・大自然・祖先・地場の神々）概念とでは、180度違うのである。

この「神」概念のすれ違い、その根本的な違いの根源を、革島定雄は『縄文人の文化的遺伝子を今も受け継ぐ現代日本人』（2019）で読み解いている。彼は櫻澤如一（1893～1966）の著書から、下記のような鋭い観察があったことを私たちに教えてくれている。

一般的に「西洋人は現象の世界に住んで居るから、相反する現象が同一のものであるとは思えない。その現象の彼方が見えないからである。同一の实在が相反する方向から顔を出す事が可能である事を理解することが出来ないのである。だから或者は唯心論者となり、他の者は唯物論者となり、中庸を稍導するものでもきつと尚観念論的傾向を示すか、唯物論的折衷を把持するかである。（中略）相反する何れをも同時に総合して、摂取する事が出来ないのである」。櫻澤如一のこの指摘は、西洋文明や西洋近代思潮のもつ限界をみごとに言い当てている。

さらに、櫻澤は指摘する。「東洋の精神は「見える世界」の根本原理として「見えぬ世界」を直観し、それによって「見える世界」に於ける秩序と生成を確固たらしめ、そこに絶大最高の幸福を味はふ事を念願した。ここに東洋精神の優越がある」。

ヤマトコトバにおいては、「カミ（神）」とは、その存在への最大の敬意の表現である。心底から、これはすごいと思えるものは「カミ」となりうるのだから、それらを一括総称して「八百万の神々」と呼んだ。漢字移入以前のわが国の『ヲシテ文献』の「ミソフカミ」の「カミ」のコトバを「神」に当てると、大きな誤訳が生じてしまう。

『ヲシテ文献』における「ミソフ（32）」とは、物質界の総合的な哲学的把握の「ヨソヤ（48）」に、おいて、象徴的に「ミソフ（32）」のはたらきとしてとらえた概念である。ここだけでも、簡単にコトバには尽くせないほどの深い洞察の物語が含まれている。（池田、2020b）日々身の周りで生起する諸現象で、何が本当に大事なことから「本質直感の才能」を、私たちが古代から受け継いでいることを押さえておこう。

ところで、戦後に GHQ（連合軍総司令部）の「神道指令」と「政教分離」により、日本人の「思惟の体系」と生活の基本スタイルである「神道」は、壊れるように仕向けられた。馬野周二は、急所を突いてこう述べる。

「これは彼らにとっては当然のことで、「神を祀る」ことは日本国家と言うよりは日本人の根底を形成する霊的基盤であるから、征服した民族の根本精神を破るためには、少なくともこの制度、外形は、国家的関連からは排除しなければならぬ。けれども自由民主主義を標榜するからには、個人の精神的自由を法律によって規制することは、彼らにとって自己撞着となる。そこで神社の国家支持を廃すること以上はできなかつた」。

だから、戦後の一時期、お宮の経営はどことも苦しかった。だが、間もなく従前以上に回復してきた。それは多数の日本国民が神社仏閣に詣で、祖先を祀り、独自の霊的精神性の基盤を失わなかったからである。多数の氏子たちが神社を護った。

一般的に云って、「神道」とは日本人がこの存在世界、すなわち宇宙万物の偉大さや尊厳を感じ取り、それに慎ましく感応してきた道の伝承体系である。それゆえ、「神道」には、日本人の宇宙の神聖さの感じ方が折りたたまれ、宇宙万物への祈り方・祀り方が織り込まれている。（鎌田東、2009）

馬野は「神道」と「祭政一致」について、さらにその本質を鋭く指摘する。「西洋人が間違っているのは神道を宗教と考えているからなのだ。神道は「教」ではない。だから宣教師などはいない。それは「道」、さらに言えば日本生まれの血を持った者の「産土（うぶすな）の道」なのだ。生得の自然なのだから、神道を他民族に教え、強制することは無意味であり、不可能である」と。（馬野、2000、244 - 246）

もともと「文字を書いて読む運用能力」の持ち主は、古代においては、上層階級の選りすぐりの人々であったことが想像できる。一般的に、日常に話される「ヤマトコトバ」は、共同体の構成員の話者がいるかぎり代々続く。

しかし、「文字を書いて読む運用能力」は、教える長老や親族が争いによって根絶やしにされてしまった場合、残された子供たちには、書いて記録する行為と、書かれた文書の意味を読み取る行為は不可能になってしまう。

古代の日本において、皇室に近く、祭祀を司ってきた氏族のなかで、圧倒的な漢字文化流入に妥協して漢字を学び始め、要領よく生き長らえる氏族や分家もあれば、純粹に古神道と和歌の道をまもろうと一途の、孤立無援の氏族や本家本元が存在したことも私たちには理解できる。

時に利あらずのなか、祭祀を享け賜ってきた一族の中でも、氏族の生き残りの直系の後継者が、どうしても伝えたい、清明の「ヲシテ文字の和歌」の横に、数百年後でも意味がわかるようにと、わざわざ漢訳をつけながら、代々写本を繰り返しながら後世へ伝え、現代の国立公文

書館蔵（内閣文庫、小笠原長武写本）にもたらされた。

平成4年（1992）、和仁佑（三輪）安聡の自筆による、漢訳付き『ホツマツタエ（秀真政傳紀）』の原本全三箱（天・地・人、各八冊）が、奇しくも滋賀県高島市安曇川町日吉神社【祭神、邇々杵尊（ニニキネノミコト）】の御輿蔵より発見された。安聡末裔の井保家第二十一代（分家第三代）の井保孝夫氏も大変な驚きであった。氏子総代として他の三人と共に、氏神様の諸行事に携わり準備の折り、蔵奥の雑然とした棚に、昔の祝詞や壊れた馬具などに混じって置かれている古い木箱が見つかった。（筆者注：以後『ホツマツタエ』と表記していくが、引用の著者が『秀真伝』ないし『秀真政傳紀』を使用の際はそれに従って表記していく）

蓋の埃を払うと、墨字で『秀真政傳紀 人ノ巻八冊』と記されており、箱の中には和綴じの書物が八冊入っていた。その一冊を取り出して開くと、神代文字と漢字ばかりで、かなり古い書物だった。その時、井保孝夫氏の脳裏に、ふと「ホツマ」のことが思い浮かんだ。本家の井保吉兵翁に聞いたことがあったからだ。

早速、三人の了解を得て、吉兵翁を訪ねたら、「これは貴重なものが出てきた。もうほかになかったか？」という翁の指示で蔵へ引き返し、再度棚の奥を探してみると、埃にまみれた同様の木箱がさらに二つ出てきた。もし、あの時、この古書に誰一人関心を示すことなく、そのまま蔵に納めてしまっていたら、おそらくは永久に埋もれたままになっていたかもしれなかった。

その後、松本善之助は、井保家のルーツを『ホツマツタエ』第30と31アヤに記載される神武天皇の皇子（中宮長男）カンヤイミミ・イホヒトが井保家の先祖ではなからうかと推定した。

国を平定したことにより、タケヒトはカンヤマト・イワハレヒコ・タケヒトと名乗り、神武天皇は正式に即位された。場所は三輪の地（現桜井市）であった。『ホツマツタエ』には、このときの「三種の神宝の授受」、「都鳥の歌」、「大嘗祭（オオナメエ）の儀」、「イスキヨリ姫の慕情」、「日嗣皇子の誕生」、「神武天皇崩御」、「カヌカワミミ即位（第二代綏靖天皇）」、「神武天皇葬送の儀」など、記紀では今までよくわからなかったことが豊富に記述されている。

井保家のルーツの、イホヒトが祀られている多神社（延喜式内明神大社：奈良県磯城郡田原本町）の現在の神職は、多忠記（おおただふみ）氏である。古事記によると、多氏の関係士族の筆頭には「意富臣」とされている。

この「意富（イフ）」という字は、ハ行音韻の変化により、「イホ」と読むことも可能である。当時は漢字が伝来して日が浅く、漢字の表意文字を借字として使用したこと。古事記の編纂者である太安万侶は、人望の高さゆえに、後に「多」から「太」の字に変えたものと思われる。つまり、いにしえからの三輪（井保）家の祖先は、神武天皇の中宮長男のイホヒトであると、松本善之助たちは推定している。（松本善、2000、3 - 16）

2. 祝詞の原初的意味、『フトマニ』の「モトアケの図」、蔵内数太『易の社会学』

毎年、日本全国では、歴史的に重要でかつ厳かな、さまざまなお祭りが執り行われている。その中で、7月の三重県那智の火祭りがある。7月13日の夕刻から執り行われる宵宮での圧巻は、池田満たちが指摘するように、巫女の舞いでの古いウタの朗詠にある。

「アハレ アナオモシロ アナタノシ アナサヤケ オケ このウタは『ホツマツタエ』にもほぼ同じ文で出ている（ホ7）。落ち着いて朗々と歌う声は、夜のすずしげな社前に吸い込まれてゆく。何ともおっとりとした温かなフシ廻しだろうか。何回聞いても飽きがこない。ヤマトコトバの古来での本当の調子は、ここに残っているのではないか」。

夜が明けると14日、お祭りの本番になる。那智山の大神前には、扇御輿（おおぎみこし）の十二体が勢ぞろいしている。日の丸の扇がそれぞれ三十二扇も取り付けられている。それが不思議なことに、『ホツマツタエ』（ホ1）の記述内容と一致する、平安時代ぐらゐまではさかのぼれるお祭りなのである。

「カラスアフギのミコシは十二台。ヒアフギの草が各々四株つけられていて、全部で四十八株。そして日の丸扇は全開三十扇と半開二扇の合わせて三十二扇。三十二という数字は、魔除けのウタの文字数である。普通の和歌の三十一文字に、わざと一文字多くして、月と月の間に、隙間をあけさせないようにして魔物の侵入を除くウタである。（中略）半開の扇を半分として、二扇あるのが一扇分ということになる。この一扇分を全開の三十扇に足すと三十一の数字になる。これは太陽年の三六五、二四二日を十二で割ると三〇、四余りの数字が得られる。切り上げてまると三十一日になる。魔物のツケ入るスキを開けないために、開こうとする半開の扇の二扇を用意しておいて、三十一日のところを三十二扇で満たしておく。こうやって魔除けウタの意味を表現しているのが、那智の扇御輿だったのである」。（池田、2003、27 - 32）

人間には本来、自分の内に秘められた神性がある。熱田神宮や大神神社で奉仕された小林美元によれば、古い古語に、斎（いわ）い祭るという言葉があり、この「斎う（祝う）」という言葉は、結わう、という意味に通じている。祀りごとの本質は、神々と人との共感・交流にあり、自らが限りなく神々の靈性に近づいていく努力をすることを言う。

目には見えないけれども、宇宙を支配して、統率している大きな力と生命力に対して祭りごとを行う。「いつものお守りを感謝する、そういう言葉を祝詞と言う」。

神道には「内清浄」と「外清浄」があって、「内清浄」とは心のもち方について、「外清浄」とは身体のもち方についての清めである。私たちの祖先は、神祀りの前には、通常的生活から必ず衣食住をこと分けて清らかに保ち、神に仕え祀るといふ、こういう重い儀式に奉仕してきた。その祀りの祭典が終わって、祀りに参画した人々が神に捧げたそのお下がりをいただいて、神とともに宴楽するのを直会（なおらい）と言い、私たちの大切な至福のひとつであった。（和歌森、1972b。小林美、1998、172 - 233）

今日、私たち日本人が知っている神道の祝詞の一つ、「トホカミエヒタメ」の言葉の深い意味とその由来が、『古事記』、『日本書紀』、『古語拾遺』より以前の、もっと古い中期から晩期縄文時代の頃の各種の『ヲシテ文献』テキストに縷々と説明されている。

馬野周二も、すでに30年前から『ホツマツタエ（秀真政傳紀）』を世に知らしめてきた一人である。「今から約三〜四千年前、すでに五十音の表音文字マトリックスが存在していた。これは今日ヲシテ文字と呼ばれている。当時の上層階級はこれを日常使用していたのだ。此の書によると、今日に繋がる日本国家を開創したのは國常立尊（クニトコタチ）で、その高遠な建国理念は『ホツマツタエ』に明らかである。勿論、この尊の血統は、今日の天皇家に繋がる。（中略）その定めた日本国家の規範は、誰気付かない内に四千年後の今日まで連綿と続いている」。（馬野、2000、8 - 10）

さらに、松本善之助は、こう述べる。「私（松本）をこんなに駆り立てるのは、ホツマツタエやミカサフミの中に、真の日本があるからである。私は日本人だから、本当の日本人になりたいと熱望する。これは已むに已まれぬ欲求なのだ」。（松本善、2016、440 - 451）

池田満によれば、2012年に「カクのミハタ アワウタのアヤ」が奇跡的に出現し、それ以前に解らなかった「アイフヘモヲスシ」や、「トホカミエヒタメ」の詳しい意味合い他、日本語の構文の形成に関する根本原理についてまでの新知見がもたらされた。（池田、2020b）

数詞のヒフミヨキムナヤコト、モモ、チ、ヨロなどは、多くの場合、ヲシテ文字にハネが付けられている。これを数詞ハネと呼んでいる。『ヲシテ文献』の存在によって、日本語（ヤマトコトバ）の骨格と運用がどのように古代から近代までに形をなしてきたのか。「ナカツホのチマト」（二文節の対比によって文章の構文ができることや、助詞の原初の発生の仕方など、「ヤマトコトバ」の根本構造の究明にもつながってきた。

「世界史を見渡しても、語義と文法上の機能とを文字系によって一般的に表現している文字は、他には見当たらないのではなかろうか。」（山田、1938=1970、189 - 237。青木・斯波、2015、2 - 51、367 - 381。池田、2020b）

「トホカミエヒタメ」は、祝詞の短い言葉のひとつである。ヲシテ時代では、祝詞のことを、「ノト」と表現されていた。南に向いて立つと、東は左手になり、西は右手に位置する。この立脚点から「トホカミエヒタメ」を、四方に配置して見る。エは冬であり、下に位置する。タは春であり、左側になる。トは夏であり、上に位置する。カは秋であり、右手側になる。各々を季節の守りとしたのである。クニトコタチは、とくにトの夏、伸び栄える季節を重要視した。このため、もともとはエヒタメトホカミの順番だったものを、「トホカミエヒタメ」と称えることになる。（池田、2020a、199 - 201。松本善、2016）

「フトマニ」という語は、『ホツマツタエ』の第3（一姫三男生む殿のアヤ）や、『日本書紀』にも出てくる。イサナギ・イサナミのフタカミに、豊受神は「フトマニ」をもって「言挙げ」のあり方を占った場面だ。『古事記』にも同様に記載があり、「フトマニ」の言葉は古くからあった。

人事・社会事象の、豊かな経験を母体として成立した、易の六十四、あるいは『フトマニ』の百二十八の、卦としてのパターンのパラダイムに、今日の人文・社会科学の研究者が無関心であってよいはずがない。生起する出来事を、根本的に、変化の中で祖先たちが考察し、その本質をトータルにとらえようと努力してきたものであるからだ。

『カクのみハタ』に含まれる『フトマニ』も、『ホツマツタエ』も『ミカサフミ』も、漢字が渡来してくる以前に、わが国で、ヲシテ文字で編纂された文献である。

2012年には、『カクのみハタ』諸本のひとつである『トシウチニナスコトノアヤ』が、溥泉の『神嶺山傳記』を底本として、『ミカサフミ』、『フトマニ』と一緒に、池田満によって校合と註釈本が刊行されている。

これらの『ヲシテ文献』の文章には、『古事記』や『日本書紀』や『古語拾遺』などが書き渡らした出来事や、古代日本の様々な日常行事はもちろん、社会統合の根本原理、及び「国家建設の根本理念」が濃厚に縷述されている。

私たち人間が営む社会生活では、例えば天・地、昼・夜、引き潮・満ち潮など、あらゆる事物に陰と陽の区別がある。さらに春夏秋冬など、いろいろな拮抗関係が複雑にからみあいながら展開することで、人間世界の歴史的出来事や、社会的事象が次々と現象してくる。

蔵内数太は、易や占いなどの基本的な考えをこう述べている。「易とはそもそも変化のことであるが、あらゆる現象の根底に陰陽の二要因を認め、陰は陽に変わり、陽はまた陰に変わるといように、事象を変化の相に於いてとらえようとするものである」。

易の場合においては、まず、一陰一陽だけのもっとも単純な場合の組み合わせを考える。陽と陽、陰と陰、陰と陽、陽と陰、の四種類の組み合わせであり、それらの要素は「爻（こう）」となる。また、易では変化は下から上への変化として考え、下が新しいもの、上が古いものとされる。これは二とか三の字を書くとき、上から書いてくることが示す関係である。易は、陰陽い

ずれにせよ、三爻の組み合わせを基本とする（卦）。そしてこれに八種があるので、それぞれに一定の名を与え、それを八卦という。

易経の場合においては、代表的な天・地・火・水・風・雷・山・沢の象とされている、それら八卦が万象の解釈の基本モデルである。が、八個のモデルだけで万象を説くことは困難なので、六十四卦の各爻は陰陽の区別とそれぞれのその位置による意味がとらえられている。蔵内は、社会学的立場から、卦の私解として、生々、観察、吟味、結合、対立、解放、革命、分散、進捗、成就など、卦の独自の考察を展開している。（蔵内、1984、359 - 426）

しかし、『フトマニ』の場合は、単なる占いの書ではなく、易経よりもはるかに深遠な大宇宙の哲理をにじませている。

「アイフヘモヲスシ」の各一文字と、三十二のはたらき（2神で1組の16組）の各二文字の組み合わせになり、全部（ $8 \times 16 = 128$ ）で128番まであり、それぞれに歌が付いている。その内容によって、必要があれば、おのれの立つ位置の情勢が判断できる。古代においては、人間の知恵では測り知れないことをカミ様にうかがい、ご真意を承る、それが根本にあった。

実際に、オオタタネコが後年になって付け加えた序文の「フトマニを述ぶ」には、『フトマニ』は八代アマカミ・アマテルが教長となって、大勢の臣下に詠ませた歌を添削し、選りすぐって編纂した百二十八首の和歌のことである。この歌をもとに占いをしたので「もとうらつたゑ」とも云われている。『ヲシテ文献』に接触していたと推測される、真言密教の空海は、絵や梵字によって神仏を描き、なかでも「十界曼荼羅」がよく知られている。

密教は平安時代、朝廷や貴族社会などに急速にひろまっていく。仏がこの世に神の姿で現れ、神は仏の化身であるという、本地垂迹の思惟が生まれ、それは天台宗の本覚論の影響のもとに発展していく。修験道もこの密教の山岳修行を母体としている。人はもともと神であり仏であるという、神仏習合の思惟がますます発展し、神道や修験道の思惟がさらに深まっていった。

京都の吉田家は、中臣氏のもとで古代朝廷の祭官を務めた、卜部氏の流れをひく家である。吉田兼俱（よしだかねとも、1435～1511）は、吉田家累代の「靈性の淵源」を求める思惟に、伊勢神道と真言宗の両部神道を巧みに採り入れ、神道を仏儒の上に置き、これを元本宗源神道（唯一神道）と云った。天理図書館吉田文庫には、兼俱自筆の二部の神妙経が蔵され、兼俱は遅くとも文明5（1473）年以前には、すでに神道説の組織を構成していたとみられている。（吉田兼、1470=1937。出村、1997。上田・鎌田純、2004。鎌田東、2009。武光、2014）

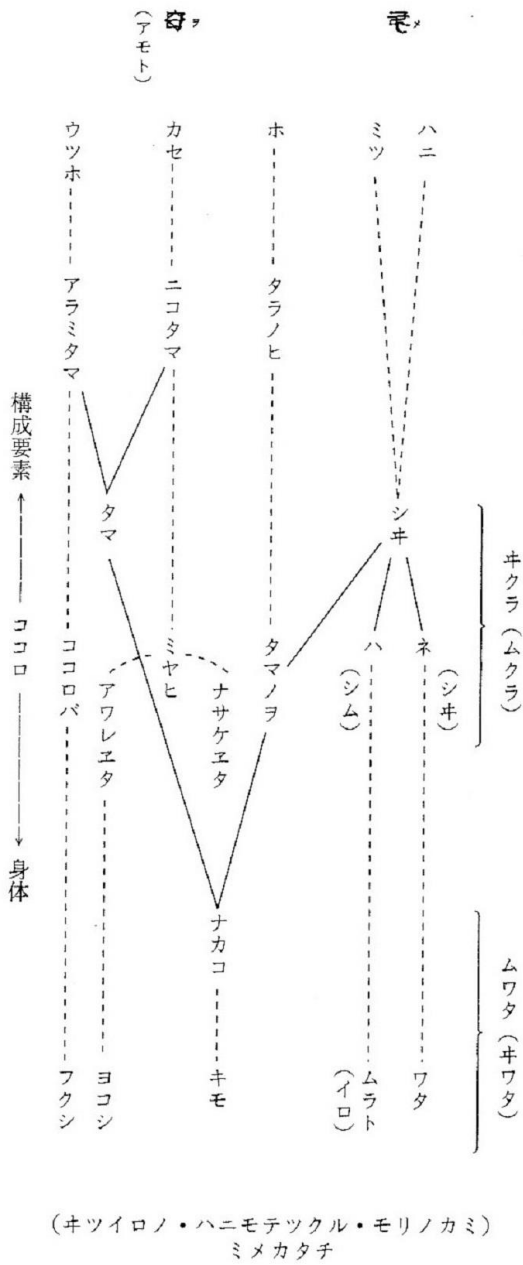
そして、はるかそれ以前に、生起する森羅万象に、深遠なる大宇宙の神秘に感応した、根本の理法を図表で体現した、驚異的なものがあった。それが『フトマニ』に付属する「モトアケの図」と、「キクラ・ムワタヲ」の言葉である。（次頁の図表1、2、3を参照）

なぜ『フトマニ』と呼称するかについては、オオタタネコが序に明確に記している。その高度な論述の中で、例えば、「キクラ・ムワタヲ」を「五臓六腑」と単純に漢字直訳してしまうと価値が消滅する。人間世界を包み込む、次元の高い大宇宙の創世の基盤を全体で表現しているからだ。「キクラ・ムワタヲ」の解釈だけで深奥な論考が成立するが、本稿では深入りはしない。

実際に、この『フトマニ』は、単なる「占い」を意味する呼称ではない。私たちがこの世に生まれて気づく、森羅万象の様々なモノの存在は、不思議であり驚くべきことでもある。

『フトマニ』の、この「モトアケの図」の中心円内に書かれた「ア・ウ・ワ」の、一番上の「ア」は天を意味する特殊表意文字、一番下の「ワ」は地を意味する特殊表意文字であろうか。「ア」は左巻き、「ワ」は右巻きの渦巻きになっている。

真ん中、中央の「ウ」は、この一字によって「初の一息」を意味していると捉えることがで



図表1 キクラムワタヲの構成

シキ	タマ	キクラ (ムクラ)	ラシテ文献でのキクラムワタ	漢字文献
シム (ハ)	シキ (ネ) ミヤヒ ナサケエタ	ムワタ	クニノミチ	
ワタ	ヨコシ	タ	ト	五臓
ムラト	キモ	ナカゴ	キミ	六腑
		タ	ト	腎
		タ	ト	脾
		タ	ト	肝
		タ	ト	心
		タ	ト	肺
		タ	ト	小腸
		タ	ト	大腸
		タ	ト	三焦
		タ	ト	膀胱
		タ	ト	胃
		タ	ト	膈

図表2 キクラ・ムワタの構成



図表3 モトアケ (フトマニの図)

きる。「初の一息」によってできた渦巻きの、巻き方を上下反転させることによって、天と地を描き分けているようにも見える。「タマ」の生じてくるのは、「ア・ウ・ワ」からである。つまり、この三文字「ア・ウ・ワ」は、「初の一息」による天地開闢そのものを表しているようで、大宇宙の壮大なダイナミズムを感じさせる。ヲシテ文字による図上での人間世界の時空を超えた表現である。周囲に配された「四十八文字」は重要な配置であり、天体の運行と、それによりもたらされる方位、方角、日照、寒暖、季節の移り変わりを「トホカミエヒタメ」という形で表現していると解することができる。

ただ、先行研究者たちの中で、池田満は、『モトアケの図』は、江戸時代において大哲理の説明のため補足された可能性が残されているとして、当初から図表すべてがその形であったかについては慎重な立場である。

参考に、『ホツマツタエ』全 40 アヤの中で、1 アヤから 28 アヤだけでも、その語彙そのものに、変化発展が容赦なく及んでいる。縄文中期に遡る、初代クニトコタチの建国から三代トヨクヌヌの時代の、竪穴式住居には住むものの稲作以前（この時代にこそ根本の精神構造が醸成）。四代アマカミから六代に至る稲作農耕の導入普及の時代。そして七代アマカミのイサナギ・イサナミから十二代アマカミのウガヤフキアハセスまでの農耕技術の発達開花期の時代が、1 アヤから 28 アヤに記載されている。語彙のさまざまな用例を見ると、時代背景を思いながら正しい語意をさぐっていかねばならない。（池田、2020a）

3. 「家制度」再考、現象学的社会学から観た唯物論的思惟の二類型

この章での、内外のさまざまな様態の「コミュニティ」の考察に際し、まず以下のように定義をしておく。「コミュニティとは、その成員が日々の営為の基礎として共通の領分を分かち合うところの集合体である」と。（パーソンズ、1951。デランティ、2006）実際に、親族のネットワーク、友人関係、共通の職業、同じ趣味の親睦会、地縁的關係は、私たちに社会的な基盤を日々提供している。

人間存在の始源的な祖先と子孫の間を、精神的につなぐものが、祖先から続く、民族によって様々な形態をとる「親族構造」と「家制度」であった。祀られる先代と、祀る人。この関係がだんだんと近づき、祀る人もやがて先祖となっていく。

先行研究としては、柳田國男や鈴木栄太郎、有賀喜左衛門、和歌森太郎、ジョン・F・エンブリー、宮本常一、余田博通たちが、農村の社会組織、同族団、本家・分家関係、長子相続や末子相続、修験道や檀家制などを研究してきた。一方、海外では、社会人類学のJ・P・マードックやラドクリフ・ブラウン、エヴァンス＝プリチャード、レヴィ＝ストロースたちがすぐれた研究成果を遺している。

日本社会の「家制度」の考察にあたり、人間社会の基本的な親族構造及び社会的編成の見解が関係するので、従来の先行研究で集積されてきた要点にごく手短かにふれておく。

マードックは主に、親族呼称、居住規制をもとにして、家族集団や親族集団、および地域集団の、さまざまなパターンを考察した。調査対象の、文化の型を同じくする部族集団は、北米の先住民から 70、アフリカから 65、オセアニアから 60、ユーラシアから 34、南米から 21 の、合計 250 のコミュニティが選ばれた。

そこでは、親族および親族呼称法の分析にもとづき、社会組織の進化の過程を取り上げている。そして人類のどの社会にも広く見られる「インセスト・タブー（近親相姦禁止）」と、配偶

者選択の社会法則とを、通時的・共時的に俯瞰して考察した。

人間社会のほとんどの集団は、婚姻適齢期になると、新夫婦の一方は、外の集団の核家族の成員から求められる。こうして親族組織というものがつくりだされる。また、親族呼称法の文化的習慣と親族関係の考察から、核家族の原理が投影されてくる。

マードックは、社会組織の「変遷」をはかる三つのモノサシとして、居住規則と出自規則と親族呼称法を挙げ、そのそれぞれをいくつもの変数（パターン）に区別している。この通文化的な観察によれば、条件への適応は、居住規則が最も早く、出自規則の変化は、居住規則の変化に続いている。親族呼称法の適応は、さらに遅れる。

ここから見えてくることの一つは、どの社会集団や社会組織でも、けっして恒常的に統合や調和の状態を維持しているわけではないこと。次に、生活条件や外的条件の影響を受けるにしてもすべての諸習慣が一律に反応するのではないこと。そこでは時系列的に前時代の「残存」をとどめながら、徐々に変化していく様子がみられる。

例えば、母系から父系への移行は、多くの場合、双処居住やオジ方居住という居住制の変化を伴って現れてくる。父系から母系への移行には、さらに多くの変数が必要である。（マードック、1949=1978、238 - 306、423 - 428）そして、それらのフィールドワークは、レヴィ=ストロースたちによって、クロス・カズン（交叉イトコ婚）などの、父系集団、母系集団、双系（多系的）集団に貫徹する、隠れた「制約=構造」の可視化。血縁・地縁を紐帯として結合する小集団（ホールド）の「コミュニティ」の組織体系の比較研究などに結びついてきた。（レヴィ=ストロース、1949=1978、866 - 871）

その重大な意義を、哲学史を熟知する情報学の西垣通は、的確にこう表現している。「自由に決断し未来を切り開く存在こそ人間だと見なすサルトルに対し、人間は社会的・文化的な「制約=構造」のもとにあると主張したのがレヴィ=ストロースであり、サルトルはその軍門に降ったのである。そこには、白人による理性重視の啓蒙主義（筆者注：理神論）が、アジア・アフリカの有色人文化を侵略する口実に使われた、という歴史的背景があった。（筆者注：普遍的な汎神論の立場からは）文明社会と未開社会の優劣など無い、というわけである」。（西垣、2020）

日本においては、地域により差異はあったが、おおまかには皇室と同様に、父系で長子相続を基本型として推移してきたとみられている。古代の姓（かばね）や連（むらじ）の時代から出でて、ついに江戸時代には、一般庶民にまで「家制度」（氏子・檀家制含む）は広まってきた。

私たちはごく自然に、「家制度」に護られ、祖先と子孫の歴史的な循環の中に、自分がこの世に生きた証し・根拠を遺してきたのである。実際、「家制度」が支えた過去から未来へのつながりには、実存的な存在根拠の「安心の装置」という積極的な側面があったのである。

家族社会学の米村千代は、初期の論考「家理論の再構築へ向けて 連続と変化の視角から」（1991）において、「家制度」の歴史の全体を大きく見据えたうえで、その重要性を示唆している。家族は現存する個人等の横の結合であるが、家はむしろ世代間の関係であり、厳密に言えば家の一つの精神でもある（鈴木栄太郎）。「家が世代を超えて存続する規範であり、同時に人々が世代を超えて連なることを可能にするものである」。一方で、家族は横断的な集団の関係としても把握できる。

客観的に見て、日本における「家制度」は、いわば「社会・経済システム」の根幹をなす下部構造でもあった。有賀喜左衛門は、家の連続を相互扶助の機能的側面から、通時的に「同族団」への志向性が観察されるところを見る。「超世代的連続への志向性は、先祖（始祖）との関係として考えることもできる。（米村、1991）

柳田國男が70歳の折り、遺言のつもりで、死者の靈魂の問題と家の祭祀との関係、家の存続の問題を結び付けて『先祖の話』（1946）で論じている。柳田國男にとって、家の問題は重要であった。それは共同体内部の核となる単位であったからである。

人倫のかなめの《社稷》を支える単位として深く機能し、社会をまとめてきた、日本における「家制度」の、重要な側面を見落としてはならない。

また、多くの民俗学者たちが示唆するように、日本の社会は、戦前から身近な「村や町の住民の助け合い」。そして、さまざまな「社会的結合」関係が、血縁的結合や経済的結合、宗教的（祭祀・檀徒・講）結合と合わせて、庶民や弱者たちの生存を確保・維持してきたのである。

日本の近代で機能してきた「社会的結合」には、年齢結合の形態として、子供組や青年組、中老組、老年組のゆるやかな、しかし、日常生活上の深い人間的交わりがあった。少年、青年、老人が社会活動から遊離し、人間的交わりが薄れている現代と比べ、各人が本質意志で交わりを深め、それぞれが年齢に応じて人格的交わりにあずかっていた。

成年式を迎えると、男性は若者組、女性は娘組に加入していたところが、幕末から明治初期の状況では多かった。当時の彼らは祭りの準備や、村の警防などを通して集団訓練を受け、親睦を深めた。娘宿で知られているのは、明治の初期、お針のお師匠さんの家が、彼女らの集会所であったようだ。若者はお師匠さんを通して、好きな娘との仲を取りもってもらったという。

社会的分業の進んだ現代の、「社会・経済システム」とはまるで形態は違うが、子供から青年、老人まで、それぞれが地縁、近隣社会の生活に重要な役割を分担し、ほのぼのとした豊かな人間的交わりの世の中が普通に存在していたと云えよう。（柳田、1946。和歌森、1972b。米村、1991。石崎、1997、62 - 69）

さて、続いて現代社会の最先端の課題の考察に移ろう。最近の経済活動は、デジタル化された電子空間で行われることが多い。高度の情報社会は、構造的に、人間の「知」をデータへと断片化し、ビッグデータの無機的な単なる「要素」へと変容させていく側面をもつ。

電子技術の高度化によって、G20の先進諸国に住む私たちは、ネットワークにつながるスマホ端末を24時間中、個々人が持つような、コミュニケーションの特殊形態に浸りきりようになった。つまり、フェイスツーフェイスの相手の全身を見ながらの、適度に間合いを置いたコミュニケーションから随分と離れてきつつある。

この現代世界の最先端のコミュニケーション形態は、「神道」の見地から見れば、大宇宙の摂理の土台のうえに有難くも生かされているという、人間存在の被拘束性の根本事実を忘れさせる傾向をもつ。大自然に根ざした人間の、実存感覚を希薄化するだけでなく、コミュニケーションの個人化、ないし独りよがりの秘儀化が進んでいるようにもみえる。その結果として、家族という血縁共同体内部のコミュニケーションですら、断片化・表層化の度合いを強めている。（山之内、2004。デランティ、2006。大黒、2016。西垣、2016）

大黒岳彦たちが指摘するように、西歐的思惟に基づき、専門分化を遂げた各領域（医療、法、経済、学問など）は、それぞれ独自の合理性に基づきつつ、固有の専門〈倫理（常識）〉を形成する。形成された各々の〈倫理（常識）〉は他領域の〈倫理（常識）〉とは依拠する合理性が異なるために互いに齟齬を来し得る。したがって、欧米型近代思潮の両極端の、理神論ないし無神論の社会モデルでは、それらすべての諸〈倫理（常識）〉の統合は望むべくもない。

こうして本来、社会的統合の至上原理であった、最低限の〈倫理（常識）〉は、社会の諸領域に分散化され多様化し、ますますわけがわからない《全体社会》になってきている。

「底なし沼の競争社会」のメカニズムに組み込まれ、分散化された〈倫理（常識）〉及び個人

的「道徳」は、個々人の心情に委ねられざるを得ない。「見える世界」だけの近代西欧的思惟にとどまっている限りは、「道徳」と〈倫理（常識）〉とは完全に乖離し、前者は客観的で実在的なものから、主観的で不確かなものへと、ますます変じていくことになる。

大黒岳彦たちが示唆するように、超高度な「情報社会」メカニズムの行き着く先の、私たちの《コミュニティ》は、死活的に重要な岐路に直面している。（大黒、2016。西垣、2016）

一般的に、地域や国の発展の基には、広く「公共心」あふれる濃密な善意で成り立つ各《コミュニティ》間の連帯心があった。

蔵内数太の現象学的社会学は、いかにして「ヲヲヤケ（公）」と《コミュニティ》の成員の本質的結合を基礎づけるかを、生涯をかけて考究してきた。とくに、テニースのゲマインシャフトを、すさんだ現代社会にどのように復権させ得るか、を考え続けたとも言えよう。

同じく、「純粹経験」から「絶対矛盾的自己同一」の思索に行き着いた西田幾多郎もまた、人間存在というものの、歴史とコミュニティを積み上げるポジティブな側面を見ていた。

西田幾多郎いわく、「人間も自然のうちに入っているのであって、物理的自然もこの歴史的自然のうちにおいて成立しており、われわれはそのエレメントである」。「われわれの自己はそのうちに生まれ、そのうちで働き、そのうちで死んでゆく。人間というものは自分自身で生まれるということができない。（中略）われわれの意識・主観的自己というものも世界から生まれて来る。そういう世界を全体としてこれを自然と考えることができる」。（上山、1963。蔵内、1976。西田・三木、2007）

私たちが旧態依然の、祭政分離というフィクション、理神論の西欧的思惟の限界内に閉じこもっている限りは、残念ながら、超高度「情報社会」における「コミュニティ」の諸問題は解決できるわけがない根本の事実である。

それら西欧的思惟に対する、日本的な生き方のセオリーは、古代より、さまざまな現実世界で花を咲かせてきた。なかでも商売の世界における「ヲヲヤケ（公）」、つまり日本の「三方よし」の尊い理念の源は、「ヲヲヤケ（公）」を背負う古代からの「皇室のあり方」から来ている。近世では滋賀県の近江商人、五個荘商人の「遺言状」宝暦4年（1754）にある条文にも、その「ヲヲヤケ（公）」の代表的な考えがみられる。

「他国の商圏内に出かけても、その商圏内の物事、その国の一切の人々がみな気持ちよくなるように心がけ、自分のことにと思わず、みなによくなるようにと思い、高利を望んではならない。何事も天の恵みしだいと思い、ただその行き先の人を大切に思いなさい。そうすれば、心は安らかとなり身も健康になる。常々神仏への信心を忘れてはならない」。

近江商人は、道路、橋、神社仏閣の補修・新設に資金を提供するなど、社会奉仕事業を熱心に行った。本家の改築や修理などは、とくに災害や凶作、不況の時期に、地域振興の一環として行うことが多かった。不況時の公共事業で景気循環に刺激を与えるという、理に沿った施策でもあった。日本の商いの中心には、自分のためではなく共同体のため「ヲヲヤケ」を第一に考える、いにしえからの魂の「アメのミチ」が生きている。（蔵内、1966、7-8。松本善、2016。呉、2017）

私たちが歴史上に体験している唯物論的思考には、国際金融資本の援助の下でレーニン、トロツキーたちが社会実験した、暴力によって政権奪取タイプの「第一の系譜」以外にもう一つある。それが1923年にフランクフルト大学において、ルカーチとドイツ共産党員が「マルクス思想研究所」を旗揚げし、語感を和らげるため「社会研究所」と改名したものだ。

これがいわゆる「フランクフルト学派」の前身である。それに、T・アドルノ、M・ホルクハ

イマー、W・ライヒ、H・マルクーゼたちが加わり、ヒトラーの第三帝国に追われて、伝統文化破壊のイデオロギーごと米国へ移住した。

コロンビア大学の援助を受け、彼らはニューヨークに新フランクフルト学派を設立。ただちに、伝統的なキリスト教価値観や社会文化倫理の破戒にとりかかった。「第一の系譜」の敵は資本主義そのものであったが、新フランクフルト学派の敵は、伝統的文化の安定性そのものであった。伝統的文化を解体し支配せよ、そうすれば国家は労せずして崩壊するというわけだ。

彼らの編み出した数ある文化闘争の新兵器のなかに、底なし沼で終着点のない、「コミュニティ」が崩壊するまで際限なくアジテーションする「批判理論」があった。その「批判理論」イデオロギーの背後には、共産主義者グラムシの大戦略があった。

ハドソン研究所のジョン・フォントによると、グラムシが信じていたのは、「全面的歴史主義」。つまり、道徳、価値観、真実、規範、人間の在り方はみな歴史的に異なる時代の産物であるということ。歴史を飛び越え、人間普遍の真実とされるような絶対的規範は存在しない。道徳観は「社会によって構築される」という、極めて偏った考え方であった。

「批判理論」の先行研究のひとつは、この学派の「批判理論」の定義を次のように述べている。「伝統的文化の主要素を完全否定する批判イデオロギーである。例えば、伝統的精神文化、因習、宗教、権威、家族、家父長制、階級制、道徳、性的節度、忠誠心、愛国心、国家主義、民族の独自性、保守主義、何から何まですべて全否定の破壊理論」である。

かつて社会革命は、書物や言論を足がかりになされようとしてきた。しかし、元戦略情報局OSS 諜報員（10年間）にしてブランデイス大学教授ヘルベルト・マルクーゼが革命を担う候補にあげたのが、「若い過激派、フェミニスト、黒人運動家、ゲイ、社会的孤立者、第三世界の革命家、その他西洋に迫害されたと憤るあらゆる「被害者」たち、プロレタリアートに代わって西洋文化を破壊するのは彼ら」だった。

「マルクーゼはセックスとドラッグがより強力な武器と考えた。著書『エロスの文明』のなかで彼は「快樂原理」を全面的に認めようとして提唱した。文化的規範はすべて拒絶せよ、そうすれば「多種多様な邪悪」の存在する世界が創出できる」と。「ジェンダーフリーなどを煽り、国家が崩壊するまで批判理論をプロパガンダする、永久革命論の極端な考え方でもある」。

問題なのは、米国社会が、この批判イデオロギーに取り込まれて大変な状況になっており、それが世界の各国へ飛び火して「思想の大戦争」となっている事実である。共産主義の「第一の系譜」の社会実験（ソ連）は崩壊したが、この際限のない無神論の共産主義の「破壊理論」が、世界中の伝統的「コミュニティ」を攪乱させながら壊し続けているのだ。

この非常事態を危惧する、現象学的社会学者たち以外では、米国のニクソン・レーガン・先代ブッシュと3代の共和党政権で外交スピーチを執筆した、保守派の重鎮 P・ブキャナンが、以下このように、悲観的に独白している。

「西洋の死に関し、フランクフルト学派は第一容疑者にして主犯格と言わねばなるまい。彼らのプロパガンダは家族崩壊に大いに寄与した。現在、全米の所帯で核家族の占める割合は四分の一以下。学派が先頭に立って擁護した女性解放運動は、女性の伝統的役割りの価値を失墜させた。（中略）すでに人口が減りはじめているヨーロッパでは、カトリック教国でさえ避妊が一般化している。避妊、断種、中絶、安楽死は、教皇聖下が断じて禁ずる「死の文化」の四大元凶である。ピルとコンドームは文化革命におけるハンマーと鎌になった」。

「マルクーゼは、セックス、ドラッグ、ロックンロールという対抗文化に行き着いた反抗的なエネルギーの持ち主たちのうちに、すぐさま読者を獲得した」。

ビル・クリントンが大統領の時代に、「ヒラリー・クリントンはニューヨーク・ゲイ・パレードに参加した史上初のファースト・レディとなった。（中略）同紙（ニューヨーク・タイムズ）政治部記者リチャード・パークが〈全米レズビアン・ゲイ記者協会〉十周年記念パーティの席で仲間に語ったところによると、「（タイムズ紙の）トップ・ニュースを決めるスタッフの四分の三は、じつはゲイなんだ」。

「中絶、離婚、出生率激減、片親所帯、十代の自殺、校内発砲、ドラッグ漬け、幼児虐待、配偶者虐待、暴力犯罪、投獄率、乱交、学力低下、どの統計も、文化革命の支配するこの（米国）社会が腐りかけ、死にかけていることを示している」。（ジェイ、1997、8 - 23。ブキャナン、2002、72 - 75、114 - 127、312 - 328。田中英、2018）

左翼の上司や教授がトップを占めるなか、テニユア（Tenure）という大学教員（社員）の終身在職権の審査制度があり、上司の信奉する理論に反する発言や研究が行えないので、増々歪んだ「批判理論」が幅をきかせていくわけだ。「じつはアメリカは日本以上にアカデミズムの上下関係が厳しく、学問の自由が束縛されているのです」。（古森&モーガン、2015、92 - 101）

今日の世界中に共通する、社会関係資本の荒廃は、「伝統文化破壊の四銃士」、すなわち無神論のルカーチ、グラムシ、アドルノ、マルクーゼたちの仕掛けであると言われている。

本論に戻ろう。この極端に位置する異常なフランクフルト学派を生んだ、西欧近代が淵源の、表の理神論（コインの裏の無神論を含む）的思惟の風土を別の側面からも見ていこう。

筆者が幼少の頃、神社の広場で行われた秋祭りや盆踊りなど、地域中の家庭が総出で楽しんだものだ。昭和40年（1965）頃までは、無意識下に氏神様と呼ばれる地域の守り神を、村落や町内の人々は団結の拠り所としていた。今でも日本全国で、約十二万の神社がある。

かつては今以上に、困ったときはお互い様という人情味あふれる温かい地域社会が存在していた。米国社会を含めて、今、そのような素のまま、心身ともに休息できる「コミュニティ」は、家庭も含めてどれほど私たちの手元に残っているのだろうか。

サスキア・サッセンもまた、グローバル企業権力の国際的な収奪により、不可視化されていく人々と空間をずっと見据えてきた一人である。サッセンが検証している流れの一つが、「主権国家に外国の主権国家の広大な土地を取得することを可能にさせる、契約の複雑な法的・会計上の特徴である。そしてもう一つが、鉱業に、土地や水系を破壊することを可能にさせる優れた工学と技術革新である」。それらグローバルな金融資本と、技術革新と情報化の推進力が、世界の人々の居住空間を、ますます邪悪な力を取り囲むに至っている。

身近な例では、日本郵便グループのかんぽ生命保険が、お年寄りをだまして不正販売で利を得る、西欧的思惟に染まりきるところまで、日本人の魂が落ち切った感がある。

明治維新以来の、私たちの文化とはまるで異質の、「社会全般の断片化」、「過剰な個人主義化」、「新自由主義の収奪社会」とは、私たちにとって一体何なのだろうか。

晩年のルース・ベネディクトは、各民族による「文化の型」の違いを強調しながら、「相乗作用（synergy）の高い社会」と、「相乗作用の低い社会」の二類型を考察している。「相乗作用の高い社会」とは、個々の個人の調和的な行動が相互の利益となり、全体の役に立つように編成された社会である。

一方、「相乗作用の低い社会」とは、妥協なき支配権の主張や、国家権力の乱用が、搾取・隷属の悪循環を生み出す社会、つまり「一将功成って万骨枯る」制度を持った社会を云う。具体的には、現代世界での、1%の側にほとんどの富と旨みが流れる「新自由主義・収奪型資本主義」や、特権階層と党の官僚組織が支配する「共産主義独裁体制」を指すこともできる。ベネ

ディクトは、それらとは正反対の、明らかに「相乗作用の高い社会」にその善さと、普遍的な価値を見出していた。（ベネディクト、1934=2008、391 - 397。権藤、1936）これは「社会・経済システム」における、「コミュニティ」の質の診断の際の重要な指標である。

江戸時代、治安を守る役人の数は、その人口に比し驚くほど少なかった。これは、当時の日本人の倫理観の高さのなせる業である。つまり、普遍的な汎神論的思惟に基盤をもつ、《社稷》という社会統合の根本原理が、私たちが祖先から代々受け継いできた「ヲヲヤケ（公）」優先の知恵の巨幹であり、国際的な収奪の制度的仕組みにあらがう大きな力であることの再確認が必要なのである。（蔵内、1978、173 - 185、481 - 486。デランティ、2006、234 - 301）

西洋的思惟が「それは日本の汎神論」だと、いかにも間違ったことだと洗脳されてきたのが、明治維新以降の今日までの、偏ったアカデミズムの「思惟の体系」であった。

そうではなく、私たちの精神的な故郷の『ヲシテ文献』テキストが示唆するように、「ヲヲヤケが高ければ高いほど、一般国民は長期の視点に立っての良い仕事に取り組むことが可能となる。低いヲヲヤケであれば、人が目先のことだけを考えるようになるのを避けられない。ヲヲヤケを高く立てるためには、トノヲシテに依拠することが重要である。トノヲシテは初代アマカミ・クニトコタチが日本国の祖形であるトコヨクニを建国した時に定めた理念で、今日の21世紀に至っても永遠不変の大原理である。トノヲシテを現代的に言い表すと「惠民立国」あるいは「文化立国」と表現できよう。（池田、2001、168 - 172）

「コミュニティ」の荒廃と国家の混乱から逃れる最良の手立ては、硬直的思考の理神論及び無神論の呪縛を絶って、「おかげさま」「おたがいさま」で共に生きる「和の文化」、すなわち普遍的な汎神論の世界観という、私たち人類の原初の故郷に戻ることはなからうか。

4. 『ホツマツタエ』と古事記、日本書紀の内容を対照、1300年の封印を解く

さて、古代文字否定の『古語拾遺』が、「蓋し聞けらく」と述べているように、人づてに聞いただけで、吟味の検証を経たわけではなかった。まして当時は、漢詩集の『懷風藻』（751）の序文が、壬申の乱（672）で古の文書類がことごとく焼けて無くなったことをひどく嘆いているように、この古文書類喪失の歴史的経緯から、一概に古代文字の存在は否定できなかった。

壬申の乱（672）では、近江の朝廷側が負け、戦後に敵対氏族の排除が行われた。また、時の権勢による、圧倒的な漢字文化導入の強力な方針が存在した。時に利あらずの一族の、存亡にかかわるあつては都合の悪い「大事な秘書」は地下にもぐる他なかったことも十分想像できる。

そして博学賢眼の馬野周二は、真贋を判定して『ヲシテ文献』をこのように絶賛した。「安政年間（1772～81）の近江に、比叡山延暦寺の目代をしていたという三輪安聡なる人物が住していて、景行天皇代に書かれたという、大変な古代史書を伝持し、それを研究、漢訳文を付けて後世に伝えるため書き残していた。この文献は神武即位前六年にその大部分が書かれていたという、世界的奇観書である。

よくよく調べてみると叡山にも関係する、奈良の僧溥泉も同じ文書を研究し、その一部は大阪の出版元秋田屋市兵衛から出されていたことが分かった。（此の文書は『ホツマツタエ』という。他に『ミカサフミ』、『フトマニ』というものも遺されていた。）これによって縄文時代末期の、三千年くらい前の史実がはっきりしてきて、記紀の神代史の空白を埋めることがわかってきた」と明確に述べる。

この『ワシテ文献』によって、竪穴時代から構造的住宅への移り変わり、採取食料から粟（木の実）植林、そして稗・米（陸稲）栽培を経る経過が書かれている。水田耕作の全国的広布は瓊瓊杵尊（ニニキネ）の時代に下るが、社会制度も雑居、雑婚から婚姻家族制度へと移ったこと、君・臣・民の区分など社会の様態がよく分かる。

「民衆のための政治、統合体としての国家を、人類史開闢以来最初に日本列島に開創したこの国常立（クニトコタチ）が「至尊」である由縁は、国と君と臣の、自ずから保つべき規範は「ヲヲヤケ（公）」であることを教えたところにある。これは千古変わらない人倫の至極であり、尊の子孫である我々が、仰ぎ躬行しなければならぬ規矩である」。そして馬野周二は、私たちのヤマトコトバの源流はワシテから創られてきたと、『ワシテ文献（ホツマ文献）』を絶賛している。（馬野、2000、292 - 297）

松本善之助と池田満は、前述のように、『ホツマツタエ』と『古事記』、『日本書紀』の三書を、原文どうして比較研究を行ってきた。（『日本書紀』は寛文9年版第一種を、『古事記』は『古訓古事記』を用いた。ともに最も信頼をおくに値する善本であるためである）

その結果、次の事実がわかった。第一の結論は、『ホツマツタエ』が『古事記』『日本書紀』が編纂されたときに用いられた原書であること。第二の結論は、『ホツマツタエ』の独自文が全体のうちの約6割も占めており、この記述箇所こそ重要な内容の縷述があったことである。三書の原文比較を総括して、池田満はこう述べる。

「『古事記』や『日本書紀』の原書が確認されたということは、日本の歴史を研究するうえでの第一文献が出現したということになる。コトの重大さについて真に理解できる人は現代人には失礼ながら少ないのではないかと私は思ってしまう。（中略）第一の『ホツマツタエ』が『古事記』『日本書紀』の原書であることについては、向後すぐれた学者の出現によって拙稿の至らざるを塞ぐことを待つことができる。ところが第二の、『ホツマツタエ』の独自文の叙述内容の奥深さについては、理解を及ぼしてゆくためには多くの時間を必要とする。このために、ワシテ文献が社会的に必要とされる時代が到来するまでに、ワシテ文献に通じた人物をある程度の人教育成しておかねばならない。ところが、一千数百年間に培われて形成されている現代の常識の一切切を一旦棚上げするところから始めてこそ、ワシテ文献独自の叙述内容への真実の理解が可能となる」。（池田、2001、239 - 241）

今日、私たちが皇室の悠久の伝統行事として目にする「着袴の儀」や「深曾木の儀」について、記紀にはこれらについての記述は見えない、しかし、『ホツマツタエ』第1（東西の名と穂虫去るアヤ）では、漢訳音読みの宮中での「着袴」などが出て来る。一般に、平安時代から貴族社会では、男女の別なく三～四歳から六～七歳ころまでの間、吉日・吉時を撰び行われてきたとされるが、実際はもっと古い習慣だったようだ。これは今日の、私たちの「七五三の起源」でもある。

『ホツマツタエ』は、縄文時代の「カミヨ」を経て、タカミムスヒのヒタカミ統への始まりから「カミヨ」までの28章が、天種子（アメタネコ）によりカンヤマト・イワハレヒコ・タケヒト（神武）に、その後「ヒトのヨ」の12章を加えた全40章が三輪の臣・スエトシ（オオタタネコ）により、ワシロワケ天皇（景行）に献上されており、古代史の実像の核心が見えてきた。（千葉、2012、664、859 - 874。池田、2020a、288 - 318）

池田満著『『ホツマツタエ』を読み解く』（2001）、池田満編著（松本善之助監修）『定本ホツマツタエ 日本書紀・古事記との対比』（2002）、松本善之助著（池田満編）『ホツマツタエ発見物語』（2016）など、古代の真実に迫る秀作が出そろい、日本国民に広く読まれてきている。

ところで、吉備真備の『道隴和上伝纂』そのものが、最澄が弘仁十年（819）に撰述した『内証仏法相承血脈譜』の中に加えられている。そのことから、吉備真備と天台宗延暦寺との密接な史料の行き来の関係がうかがわれる。

この関係から延暦寺の『ホツマツタエ』は、吉備真備の死後、彼の蔵書から延暦寺の高僧たちに伝わった可能性が高い。さらに、高野山にも古代文字の文献が存在したことが、真言宗の僧・諦忍の『神國神字弁論』でうかがわれる。それらは、おそらく延暦寺から伝わったものと考えられる。空海と最澄には、親交があった。（川口、1995）

三書の記述内容の厳密な比較から判明したように、古事記や日本書紀の記述には、その原典である『ヲシテ文献』の奥深い伝承の数々が、一部は省略されたり、誤訳されていたり、欠落していることが見受けられる。溥泉も天照大神は男性であるなどの事項にふれているように、実際に人間として生きて国を治められていた七代アマカミのイサナギ・イサナミさまの、和歌や連歌の淵源につながる大切な伝承の存在がある。

フタカミ（イサナギ・イサナミ）は、大宇宙の成り立ちから説かれる、「アウウタ」を毎日毎日お歌いになられていた。二条良基の歌論書の『筑波問答』（1357～72 成立）が、連歌の起源を、「二はしらのカミの発句・脇句にあらずや。この句、三十一字にもあらず短く侍るは、疑いなき連歌と翁心得て侍るなり」と、イサナギ・イサナミのフタカミの唱和に求めているのは周知のことである。（二条、1357=2001）

実際に、『カクノミハタ』のうちの『アウウタのアヤ』の記述によれば、イサナギ・イサナミさまは、ミ・ヲカミとヒト・メ（3男・1女）をお生みになられました。大宇宙の中心である「ア・ウ・ワ」（第3章の「モトアケの図」でも解説）のもと、トホカミエヒタメのめぐりにヒトのイノチが保たれているように、この恵みを楽しむための諭しを人々にもたらずミチのウタ。アマテルカミはワカヒメに、この覚（さと）しの教えのミチを繰り返して伝えて下さい。あなたには「ニフのカミ」の称号を授与します。ネコエのミチを聞くことができ「ニ」の原理に目覚めたワカヒメでした。

フタカミのイサナギ・イサナミが、オノコロのシマのナカハシラをめぐられて、「ツキウタ」を詠まれたのには、深い意味が込められていました。（ホ 18）ヲカミのイサナギさんが左回りにまわられてクチヒルをヒラク「アネ」から述べ続くミウタです。「ウクフヌムツルスユン」のウの行の「ニテ・付着させるはたらき」が重要です。これが「ツキウタ」の原意です。「ウマシオトメニ」と続きます。ヲカミのウタに、調子を合わせてメカミのイサナミさんが「ヤワシウタ」のウタを詠まれます。ヒトはすべて「アメミヲヤ（大宇宙の創世の祖）」に守られているのです。いわば、大宇宙に対しての小宇宙がわれわれそれぞれの人格の位置付けです。その縄文哲学、ネコエのミチをたてようとおぼされたのです。（池田、2020b）

人間存在の根本の理法と《全体社会》のさまざまな現代的課題をトータルに捉え、現象的社会学と古神道の立場から、体系的に根本の解決策をさぐっていくのが本論考の趣旨でもある。

例えば、日本の市（イチ）の語源はイツキ（斎）で、神が居着く（降臨する）場所の意味になる。市（イチ）での物品交換が、神の降り立つ聖域で行われたことが重要である。後に多くの市（イチ）は、寺院や神社の領内で行われるようになった。

文物の交換及び商いに、身分などの世俗の力関係が働いては、不公平な事態が起きてしまう。そのため、市（イチ）が社会的勢力関係から来る作為（いかさま）が通用しない、神仏の支配する聖なる領域で行われてきた。時代が進んで武家政権に至れば、天皇・公家・大寺社は、自らと結んで行商する者たちに通行許可を与えることができた。

「コミュニティは、財・サービス・資源を配分する経済的機能という点から見ると、市場や国家との相違が明らかになる。コミュニティは互酬性、市場は貨幣を媒介とする交換、国家は再分配をそれぞれ原理としている」（ポランニー、1944=2009。石黒・初谷、2014） 経済市場で激戦を続ける「企業内コミュニティ」に焦点を絞れば、1990年代までは、日本のほとんどの企業集団において、運動会や和気あいあいのイベントが普通にあったものだ。

その結果、日本的経営の驚異的な強さを、かつて経営学の中川敬一郎は、「いくさ集団のプラグマティズム」として観察していた。「ビジネス現場での戦いの役割分担の機動的かつ柔軟な、状況によっては別の部署の仲間が自発的に応援する、臨機応変な集団的組織力」体制の、世界に類を見ない強力なパワーを挙げていた。（中川、1981）

しかし、社員を非正規で消耗品の道具とみなすような、昨今の欧米型「会社組織」では、同じ会社でも部署が違えば赤の他人で、かつて1950～80年代に、日本の大企業から中小零細企業にまでみられた、組織横断的で柔軟な、総力戦型の、士気の高い組織編成ノウハウは、もはや死んでしまったかのようだ。欧米型の企業組織の悪い側面ばかりが目立つようになった。

1990年代から、グローバル資本のマクロ経済への支配能力の進展で、国内の都市空間、コミュニティの空間までが、「生存競争の底なし沼化」と非正規・契約社員の増加、労働条件の全体的劣化につながっていった。どんな業種であろうと、電子的ネットワークの過度な集積の影響は、迅速な意思決定が必要な、トップとミドルのマネジメント階層に負荷が集中していく。

その一方、一般的に云われているように、大多数のボトム層にとっては、工夫の余地が少ない、情けないほどシンプルなルーティンワーク、単純作業しか働き口が落ちていない。このアンバランスは、社会関係資本（コミュニティ含む）を減耗させながら、貧富の差と同様に、増々両極端に乖離し、「コミュニティ」成員の活力を引き裂いていくばかりである。

グローバリゼーションを進めている主流は、グローバルな世界権力に呼応する、各国の官僚機構や、西欧的近代思维に洗脳されたままのグローバル企業のスタッフたちである。現世というこの世だけの「見える世界」しか見えていない、無国籍の国際金融集団をはじめ、会計、法律、エンジニアリング、情報通信、サービス業の分野の画一化による、文明の劣化が目立つようになってしまった。

一方、共に生きる「コミュニティ」と、喜怒哀楽の「人間存在」、及び「ヲヲヤケ（公）」、「アメのミチ」などの理法は、人間と社会と大宇宙の、超越的な根拠へのつながりをにじませている。大切なことは、眼前に存在する『日本の古典』の多面的な研究が深まることである。

そこで『ヲシテ文献』テキストの研究者たちが、各分野において、今後とも継続して注力するアプローチは、大きくは五つのグループに分けることができるのではなかろうか。

一つ目は、書誌学の立場からの、『ヲシテ文献』研究の深まりである。昭和の初期に『国語と国文学』誌などを本拠に、若い学者たちで日本書誌学会が組織され、雑誌「書誌学」が発刊された。そして、「学界の見識がほぼ確立した時期が、中山正善真柱の蒐集事業の出発点でした」。

（反町、1982） 戦後に佐々木信綱博士からの系譜で、天理図書館へも「ホツマツタエ」の関係資料がもたらされている。今後、現存のすべての写本をまとめた書籍を作って、研究者のすそ野をさらに広げることが必要である。

二つ目は、漢字が流入して来る以前の、ヲシテの原字で綴られている原初のヤマトコトバの蒐集と、在りのままでの整理・分類の、語彙史の地道な研究である。

例えば、「ホツマツタエ」に限定しても、1アヤから28アヤまでと、29アヤから40アヤまでのグループには、約800年間もの時代の隔たりが存在している。当然に「その語意にも、変

化発展が容赦なく及んできている」。(池田、2020a、274)

三つ目は、中期から晩期縄文時代の、原初『ヲシテ文献』そのままの構文（統辞）の在り様と、漢字移入後の文献の、「上代特殊仮名遣い」及び「係り結び」、「動詞の活用原理」などの観点から、綴られた構文や句節の対比の研究である。ヤマトコトバにおいては、語順が重要な役割を果たしている。例えば、ハ・モ・コソの係助詞は、主部の「題目」（または「対象」と述部の「説明の部分」との組合せで文を作る構文法の、基本の一つを担っている。(大野、1993)

池田満によれば、「動詞は原理として語尾がア列ならば未然に働く。これはウツホの態である。語尾がイ列はカセに働いて名詞体・連用にかかる。語尾がウ列は、ホ（火）に働いて分詞法・連体となり、語尾エ列はミツ（水）に働いて命令体。已然体となる。この原理は漢字文献時代になっても引き継がれてゆく」。(池田、2020a、278 - 279)

四つ目は、『ヲシテ文献』が和歌の道の深遠な淵源を具体的に語っており、歌学秘伝史の研究テキストとして真剣に取り組みられている側面である。神道と王道と歌道は、切り離すことができない一体のものであった。

五つ目の方向は、筆者の場合のように、「思惟の体系」の観点、社会思想史（汎神論的・神仏習合）の流れから、『ヲシテ文献』テキストが吐露する深遠な、永遠なるものへのつながりの思惟、人間存在の被拘束性を包み込む、大宇宙哲理そのものの考究である。

これらの研究については、私たちが意味を理解したつもりになって、現代語訳という表面的な網ですくった途端に、もっと大事な残りの80%の宝物が網目から抜け落ちてしまう。そんな不可避のジレンマが存在している。

むすび 人間と社会の超越的なる根拠へのつながりの《 社稷 》の重要性

以上、権藤成卿の洞察した《社稷》、及び北畠親房や吉田兼俱、溥泉や山鹿素行たちの「人間社会」への鋭い洞察の系譜と、コミュニティの本質についてを深く考察してきた。そして、「神仏の習合」の思惟、すなわち「日本思想史の汎神論的哲理」の普遍性についても詳述してきた。

橋本進吉博士たちが示唆するように、国語はいわゆる第一級の文化財のひとつであり、過去の国民の経験や思想感情がこれに宿って伝わり、次の世代はその国語を学ぶことによって伝統的「思惟の体系」を自己のものとして生活を営む。まさに時代を切り拓く知恵の宝庫である。(浅野、1933。橋本、1946、300 - 306。時枝、1955、196 - 211)

コミュニティの本来の在りようにおいては、カミを祀ることの重要性をわかっていなければ、共同体の本質の奥儀は解けない。池田満たちが指摘するように、三千年以上も秘められてきていた真実は、こちらから求め、寄り添っていくことから、輝きをあらわしてくる。ダイヤモンドの原石のカッティングの作業が、ヲシテ文献での寄り添いである。寄り添いとは、ヲシテの原字に親しむことである。

漢字が移入される以前の精神世界については、漢字以前に用いられていた、ヲシテ原字そのものによって解読を進めていかなくは、漢臭（かんしゅう、漢字の象形的意味にとらわれてしまうこと）に曇らされて、真実が見えてこない。

専門的な歴史の高度な内容を、平易な語りによって既成概念を打ち破った重要な研究書、池田満の『『ホツマツタエ』を読み解く』（2001）と『定本ホツマツタエ 日本書紀・古事記との対比』（2002）が今静かに、国民から評価・支持されてきている。私たちの精神の故郷の『ヲシテ文献』には、混迷を深める現代社会の羅針盤となる深い知恵と哲理が満ちている。漢字渡

来以前の、日本の心の原点を知るための、まさに第一級の基礎資料でもある。

『ヲシテ文献』や『先代旧事本紀』の原テキストを読みもしないで、頭から退けるのではなく、実際に原テキストを読み込んで、そのみるべきところを正しくみることで、真贋がおのずから判明し、古代史と「思惟の体系」の歴史の、全体像の真実をつかむことができる。

蔵内数太博士の言に即した実地応用の、「社会・経済システム」の分析・研究として『アメリカス研究』誌において、2010年から始まる三回の「帝国の鳥瞰」シリーズ、その後の五回にわたる、毎年の「現集団」概念と経済人類学の射程（国際的な制度設計の権力をもつ集団の具体的な行動）考察シリーズが、一昨年に一段落を終えた。

全体で三部作予定の「汎神論の射程」シリーズのうち、今回の第二作においては、コミュニティとテクノロジーとのかかわりの、深い次元からの考究をも前に進めていこうと思う。

もちろん全体的には、『ヲシテ文献』とその後に成立の、「変体漢文」文献との対比を通じて、漢字渡来以前のヤマトコトバの文化が、漢字渡来後においてどのように外国文化を取捨選択しながら受容し、自家薬中のものとしてきたかの過程の裏付けも行っていく必要がある。

実際、先行研究者の池田満は、「延喜式の神祇八にある祝詞の六月晦大祓には「白人。胡久美。云々」の記述があり、これは『ホツマツタエ』7アヤなどを底流としている。また同じく延喜式の祝詞の御門祭の「櫛磐牆豊磐牆命（くしいはまととよいはまとのみこと）」は『ホツマツタエ』21アヤなどを原形としている」と示唆する。さらに、賀茂在方の『暦林問答集』（1414）などへの影響も、具体的に指摘している。（池田 2002、14）

幸いなことに、鎌倉時代には成立の『類聚名義抄 観智院本』の仏、法、僧部の三冊が、和訓の朱筆が判別できるカラー版の天理図書館善本叢書として、2018年に刊行されている。また、順徳天皇の撰になる『八雲御抄』（やくもみしょう）全巻の和歌の註釈と、歌の道の事項索引などが2013年に完結している。2017年には、神道と王道と歌道を一つの姿において捉える重要な著、三輪正胤の『歌学秘伝史の研究』が世に出ている。

和歌の五七五七七の三十一文字は、「歌の根元」としている宗祇（1421～1502）に対し、「ホツマツタエ」第1アヤが伝えるように、ひと月の三十一日の「天道の循環」に準えて、語妙・意妙・句妙・始終妙について深く考えるのは、吉田兼俱が書いたとされる『八雲神詠伝』などである。（片桐、2013。三輪、2017。吉田唯、2018）

日本人は古来より、汎神論の世界観をもち、神武天皇以前から、民は「カミ（すなわち自然）」と直接つながっておられる天皇の存在を大切に思い崇めてきた。また、天皇は民を大御宝として大切に思い、安寧を祈って下さるという「君臣民一体の国柄」を続けてきたのである。一月には、永遠なるものへのつながりである、新年の制として、皇居にて歌会始（和歌御会始）が行われる。（北畠、1339。山田、1936。山鹿、1942b。浅利、2008。西尾、2010。馬淵、2012。関野、2015。渡部、2016。三輪、2017。田中英、2017）

《全体社会》存立の根本の理法が、縄文時代にさかのぼる『ヲシテ文献』に示されている。混迷の時代にあって大切なことは、本当の『日本の古典』を現代に取り戻すことである。

すさんだ無神論の「唯物論的思惟に基づく批判理論の社会モデル」には未来はない。蔵内数太博士たちが、「人間が織り成すコミュニティ」の史的展開を吟味・観察し、西洋と東洋及び日本がそれぞれにもつ真髓を止揚しようとした、より深い総合的視座の存在意義がそこにある。

「祖先と自己と次世代」の実存循環のかなめである「家制度」の積極的側面を押さえながら、私たちが日本に生まれたことに誇りを持ち、世界に貢献できる高い精神性を次の世代に伝えていこう。そして、本来の《共に生きる人間社会》に戻していこう。

（付記：本稿は筆者の個人的研究及び見解に基づくものであり、天理大学アメリカス学会の見解ではないことを申し添える）

【主要参考文献】

- 青木純雄・ス波克幸（2015）『よみがえる日本語Ⅱ 助詞のみなもと「ヲシテ」』 池田満 監修、明治書院
- 浅野信（1933）「品種詳説（動詞・名詞・形容詞・助辞他）『巷間の言語省察』 中文館書店
・・・（1957）『新撰 日本文法辞典 文語篇』 森北出版
- 浅利誠（2008）『日本語と日本思想 本居宣長・西田幾多郎・三上章・柄谷行人』 藤原書店
- 有坂秀世（1955）『上代音韻攷』 三省堂出版
- 池田満（1999）『ホツマ辞典』 展望社
・・・（2001）『『ホツマツタエ』を読み解く』 展望社
・・・（2002）『定本ホツマツタエ 日本書紀・古事記との対比』 松本善之助監修、展望社
・・・（2003）『縄文人のころを旅する』 展望社
・・・（2004）『記紀原書 ヲシテ（上・下巻）』 展望社
・・・（2012）『新訂 ミカサフミ・フトマニ 校合と註釈』 展望社
・・・（2013）『よみがえる縄文時代 イサナギ・イサナミのころ』 展望社
・・・（2020a）『ホツマ辞典 改訂版』 展望社
・・・（2020b）「ヲシテ講習会（京都）の池田満講義第54、55回レジュメ」（Web 対応）
- 池間哲郎（2015）『世界にもし日本がなかったら』 育鵬社
- 石黒馨・初谷譲次編著（2014）『創造するコミュニティ』 晃洋書房
- 石崎正雄（1958）「日本書紀弘安本と乾元本との関係について ト部家学研究の一節」『日本文化』第37号、天理大学おやさと研究所編
・・・（1997）「教祖在世時代の村の「助け合い」」『教祖とその時代 天理教史の周辺を読む』 天理教道友社
- 市井三郎（1978）「神皇正統記の思想 儒・仏・神の統合」『近世革新思想の系譜 NHK 大学講座 1978年10月～1979年3月』 日本放送出版協会
- 伊豫谷登士翁編著（2002）『グローバリゼーション 知の攻略思想読本8』 作品社
・・・（2013）『コミュニティを再考する』 齊藤純一・吉原直樹共著、平凡社新書
- 上山春平（1963）「西田幾多郎」『近代日本の思想家 2』 桑原武夫責任編集、講談社
・・・（1969a）『照葉樹林文化 日本文化の深層』 中公新書
・・・（1969b）「思想の日本の特質」『岩波講座哲学XVⅢ 日本の哲学』 古田光・生松敬三編、岩波書店
- B・L・ウォーフ（1956=1978）「言語と精神と現実」「原始共同体における思考の言語学的考察」『言語・思考・現実 ウォーフ言語論集』 J・B・キャロル編、池上嘉彦訳、弘文堂
- 馬野周二（2000）「日本文明の世界的始源性 秀真伝、ミカサフミ、フトマニ」『朝鮮半島の真実』 フォレスト出版
- 梅棹忠夫（1992）「日本語にみる近代化」『梅棹忠夫著作集 十八巻』 中央公論社
- ト部兼方（1293=1986）『釋日本紀』『神道体系 古典註釈編五 釋日本紀』 神道体系編纂会
- E・E・エヴァンス・プリチャード（1940=1974）「ヌア族の親族組織と政治組織」『法人類学入門』 千葉正士編、弘文堂

- ジョン・F・エンブリー（1939=1978）『日本の村 須恵村』植村元覚訳、日本経済評論社
- 大江匡房（1928）『傀儡子記』『群書類従第九輯 傀儡子記他』續群書類従完成會
- ・・・（1991）「江家次第」『神道体系 朝儀祭祀編四 江家次第』神道体系編纂會
- 大槻信（2019）「図書寮本『類聚名義抄』片仮名和訓の出典標示法」『平安時代辞書論考 辞書と材料』吉川弘文館
- 大坪併治（2005）『石山寺本大智度論古點の國語學的研究 上』風間書房
- 大野晋（1953）『上代仮名遣の研究』岩波書店
- ・・・（1993）「古典語から近代語へ」『係り結びの研究』岩波書店
- 大矢透（1918）『音図及手習詞歌考』上田萬年監修、大日本圖書
- 岡山大学言語国語国文学会編（2020）「追悼大坪併治（国語史）先生」『岡大國文論稿 第48号』
- 奥村榮實&大矢透（1977）『古言衣延辨・古言衣延辨證補』中田祝夫解説、勉誠社文庫
- 吳善花（お・そんふぁ）（2017）『日本にしかない「商いの心」の謎を解く』PHP研究所
- 片桐洋一（2013）『八雲御抄の研究 名所部 用意部』和泉書院
- 加藤謙吉（2018）『『日本書紀』と壬申の乱』『日本古代の豪族と渡来人 文献資料から読み解く 古代日本』雄山閣
- 狩野亨吉（1958）「天津教古文書の批判」『狩野亨吉遺文集』安倍能成編、岩波書店
- 鎌田純一（1998）「渡会行忠、家行、慈遍の学問」『中世伊勢神道の研究』續群書類従完成會
- 鎌田純一・上田正昭（2004）『日本の神々 『先代旧事本記』の復権』大和書房
- 鎌田東二（2009）『神と仏の出逢う国』角川書店
- 川口高風（1995）「神国神字辨論」『諦忍律師研究 下巻』法蔵館
- 革島定雄（2015）『理神論の終焉 「エントロピー」のまぼろし』東京図書出版
- ・・・（2019）『縄文人の文化的遺伝子を今も受け継ぐ現代日本人』東京図書出版
- ・・・（2020）『「相対論」「集合論」といったペテンが、現代人の心を蝕んでいる』東京図書出版
- 北畠親房（1339=1983）『神皇正統記』『日本古典全集 神皇正統記 元元集』現代思潮社
- 木田章義（2015）「日本語起源論の整理」『日本語の起源と古代日本語』臨川書店
- 釘貫亨（2015）「古代日本語動詞の歴史的動向から推測される先史日本語」『日本語の起源と古代日本語』臨川書店
- 蔵内数太（1966）『社会学 増補版』培風館
- ・・・（1977）「人間・社会・宗教」、「宗教社会学の問題」、「文化社会学要説（連句の社会学）」『蔵内数太著作集 第二巻』関西学院大学生生活協同組合出版會
- ・・・（1978a）「関係と集団、集団の形態、全体社会の変動」、「変動の集団的因子（前集団・役割集団・後集団）」『蔵内数太著作集 第一巻』関西学院大学生生活協同組合出版會
- ・・・（1978b）「テンニエスの社会形態論」、「文化と教育 社会学的研究」『蔵内数太著作集 第三巻』関西学院大学生生活協同組合出版會
- ・・・（1979）「現象学的社会学」、「日本思想の社会観一斑」、「前集団、現集団、後集団」、「法則・運命、規範・潮流」『蔵内数太著作集 第四巻』関西学院大学生生活協同組合出版會
- ・・・（1984）「銅鐸と共同社会」、「正倉院八卦背鏡私考」、「易と社会学（卦の私解の例）」『蔵内数太著作集 第五巻』関西学院大学生生活協同組合出版會
- 蔵中しのぶ（2017）「氏族の伝・国家の伝・寺院の伝 「大安寺文化圏」以前の僧伝」『古代の

- 文化圏とネットワーク』蔵中しのぶ編著、竹林舎
- シオドーラ・クローバー（1961=2003）『イシ 北米最後の野生インディアン』行方昭夫訳、岩波現代文庫
- アーノルド・ゲーレン（1985）『人間 その本性および自然界における位置』平野具男訳、法政大学出版局
- 国文学研究資料館編（2005）「神皇実録」『伊勢神道集 真福寺善本叢刊第二期 8 神祇部三』阿部泰郎・山崎誠編、臨川書店
- 小島敬和（2020）『ホツマを伝える神社 本殿の建造様式』東京図書出版
- 小林達雄（2018）『縄文文化が日本人の未来を拓く』徳間書店
- 小林由美（2006）『超・格差社会アメリカの真実』日経BP社
- 小林美元（1998）『古神道入門 神ながらの伝統』評言社
- 小松（小川）靖彦（2017）「日本古代書物史序章」『古代の文化圏とネットワーク』蔵中しのぶ編著、竹林舎
- B・コムリー、S・マシューズ、M・ポリンスキー編（1999）『世界言語文化図鑑 世界の言語の起源と伝播』片田房訳、東洋書林
- 古森義久&ジェイソン・モーガン（2015）「歴史修正主義批判を問う 知られざるアカデミズムの言論弾圧」『Voice 2015年7月号』PHP研究所
- 小森義峯（2011）「神道の世界宗教的性格 政教分離原則の根源的探求のために」『憲法論叢 第18号』関西憲法研究会
- 権藤成卿（1927=1972）「自治民範」『権藤成卿著作集第一巻』黒色戦線社
- ・・・（1932=1972）「農村自救論」『権藤成卿著作集第二巻』黒色戦線社
- ・・・（1936=1977）「自治民政理」『権藤成卿著作集第四巻』黒色戦線社
- ・・・（1936=2013）「自治民政理 後篇」、「血盟団事件 五・一五事件 二・二六事件 その後に来るもの」『行き詰まりの時代経験と自治の思想 権藤成卿批評集』書肆心水
- サスキア・サッセン（2008）『グローバル・シティ ニューヨーク・ロンドン・東京から世界を読む』伊豫谷登士翁監訳、大井由紀・高橋華生子訳、筑摩書房
- ・・・（2017）『グローバル資本主義と〈放逐〉の論理 不可視化されゆく人々と空間』伊藤茂訳、明石書店
- マーティン・ジェイ編著（1997）『ハーバースとアメリカ・フランクフルト学派』竹内真澄監訳、赤井正二・池田成一・豊泉周治・永井務訳、青木書店
- 慈遍（1335=1977）『旧事本紀玄義』『日本思想体系 19 中世神道論』大隅和雄校注、岩波書店
- 心賀（1973）「相伝法門見聞（二帖御抄）」『天台本覺論 日本思想体系 9』浅井円道・大久保良順・多田厚隆・田村芳郎校注、岩波書店
- ジョゼフ・E・スティグリッツ（2012）『世界の99%を貧困にする経済』楡井浩一・峰村利哉訳、徳間書店
- ・・・（2015）『世界に分断と対立を撒き散らす経済の罟』峰村利哉訳、徳間書店
- 関野通夫（2015）『日本人を狂わせた洗脳工作』自由社
- ・・・（2019）『一神教が戦争を起こす理由 世界史で読み解く日米関係』ハート出版
- リチャード・セネット（1991）『公共性の喪失』北山克彦・高階悟訳、晶文社
- 反町茂雄（1982）『定本 天理図書館の善本稀書』八木書店
- 大黒岳彦（2016）『情報社会の〈哲学〉 グーグル・ビッグデータ・人工知能』勁草書房

- 滝沢誠（1996）『権藤成卿』ペリかん社
- 武田祐吉（1973a）「古事記における歌謡の伝来」、「本辞の祭祀性」『武田祐吉著作集第三巻古事記篇Ⅱ』角川書店
- ・・・（1973b）「柿本朝臣人麻呂歌集の研究」、「柿本人麻呂の作品」『武田祐吉著作集第七巻万葉集篇Ⅲ』角川書店
- 武光誠（2014）『神道 日本が誇る「仕組み」』朝日新聞出版
- 辰巳正明（2019）『懐風藻 古代日本漢詩を読む』新典社
- 田中草大（2019）『平安時代における変体漢文の研究』勉誠出版
- 田中英道（2017）『日本人にリベラリズムは必要ない リベラルという破壊思想』KK ベストセラーズ
- ・・・（2018）『日本人を肯定する 近代保守の死』勉誠出版
- 千葉富三編著（2012）『甦る古代 日本の真実 全訳秀真伝 記紀対照—1300年の封印を解く』文芸社
- ・・・（2018）『甦る古代 日本の原点 秀真伝 解明—古事記・日本書記の底本だった』明窓出版
- 築島裕（2015）「万葉集の訓法表記方式」『築島裕著作集 第二巻 古訓點と訓法』汲古書店
- ・・・（2019）「日本語の起源」『築島裕著作集 第四巻 國語史と文献資料』汲古書店
- 網澤満昭（1994）「社稷のことなど」『近代日本思想の一側面 ナショナリズム・農本主義』八千代出版
- 津山恵子（2016）『「教育超格差大国」 アメリカ』扶桑社新書
- 出村勝明（1997）『吉田神道の基礎的研究』神道史學會、臨川書店
- 寺村秀夫（1982）『日本語のシンタクスと意味 I』くろしお出版
- ・・・（1984）『日本語のシンタクスと意味 II』くろしお出版
- ・・・（1991）『日本語のシンタクスと意味 III』くろしお出版
- ジェラード・デランティ（2003=2006）『コミュニティ グローバル化と社会理論の変容』山之内靖・伊藤茂訳、NTT 出版
- 時枝誠記（1955）『国語學原論 續篇』岩波書店
- 富永仲基（1972）『出定後語』『日本の名著 18 富永仲基 石田梅岩』中央公論社
- 中川敬一郎（1981）「いさ集団のプラグマティズム」『日本の経営 NHK 大学講座 1981年4~9月』日本放送出版協会
- 西岡和幸（2019）「山崎闇齋と『先代旧事本記』 基礎的考察」『先代旧事本紀論 史書・神道書の成立と受容』工藤浩編、上代文学会監修、花鳥社
- 西尾幹二（2010）『GHQ焚書図書開封4 「国体論」と現代』徳間書店
- 西垣通（2016）『ビッグデータと人工知能』中央公論新社
- ・・・（2020）「読書日記 人間の尊厳につながる自由」、毎日新聞 2020年5月26日夕刊
- 西田幾多郎（1911=2003）『善の研究』『西田幾多郎全集 第一巻』岩波書店
- ・・・（1938=2005）「日本文化の問題」、「エックハルトの神秘説と一燈園生活」、『西田幾多郎全集 第十三巻』岩波書店
- 西田幾多郎&三木清（2007）『師弟問答 西田哲学』書肆心水
- 二条良基（1357=2001）「筑波問答」『連歌論集 能楽論集 俳論集 新編日本古典文学全集 88』小学館

- ロバート・D・パットナム（2006）『孤独なボウリング』柏書房
- タルコット・パーソンズ（1951=1974）『社会体系論』佐藤勉訳、青木書店
・・・（1961=1971）『社会類型 進化と比較』矢沢修次郎訳、至誠堂
- 波戸岡旭（2016）「懐風藻序文の意味するところ」『奈良・平安朝漢詩文と中国文学』笠間書院
- デヴィッド・ハーヴェイ（2012）『資本の（謎） 世界金融恐慌と21世紀資本主義』森田成他、大屋定晴、中村好孝、新井田智幸訳、作品社
- 橋本進吉（1946）『国語學概論 橋本進吉博士著作集 第一』岩波書店
・・・（1949）『文字及び仮名遣の研究 橋本進吉博士著作集 第三』岩波書店
・・・（1951）『上代語の研究 橋本進吉博士著作集 第五』岩波書店
- 原田信一（2000）『シンタクスと意味 原田信一言語学論文選集』大修館書店
- パトリック・ブキャナン（2002）『病むアメリカ 滅びゆく西欧』宮崎哲弥監訳、成甲書房
- 藤原直哉（1997）『経済の現論Ⅱ 最果ての資本主義』フォレスト出版
・・・（2015）「社稷という日本の宝物」『日本人の財産って何だと思う？』三五館
- 溥泉（1779）『春日山紀 全五冊』版本、奈良県立図書館蔵
・・・『朝日神紀』写本、龍谷大学大宮図書館蔵、デジタルで閲覧可能
・・・『神明帰仏編』写本、龍谷大学大宮図書館蔵、デジタルで閲覧可能
・・・『仏神本迹弁答』写本、龍谷大学大宮図書館蔵、デジタルで閲覧可能
- 文化庁監修（1973）「円空と橋本平八」『近代の美術 第16号』本間正義編、至文堂
- ウルリヒ・ベック（1988=1998）『危険社会』東廉・伊藤美登里訳、法政大学出版局
・・・（2002=2010）『世界リスク社会論』筑摩学芸文庫
- ルース・ベネディクト（1934=2008）『文化の型』米山俊直訳、講談社学術文庫
- カール・ポランニー（1944=2009）『大転換 市場社会の形成と崩壊』野口達彦・栖原学訳、東洋経済新報社
- エドワード・T・ホール（1959=1966）『沈黙のこぼれ 文化 行動 思考』国弘正雄・長井善見・斎藤美津子訳、南雲堂
・・・（1966=1970）『かくれた次元』日高敏隆・佐藤信行訳、みすず書房
- 益岡隆志（2003）『三上文法から寺村文法へ 日本語記述文法の世界』くろしお出版
- 松本克己（1995）『古代日本語母音論 上代特殊仮名遣の再解釈』ひつじ書房
- 松本善之助覆刻監修（2000）太田太根子原著、和仁佑安聡釋述『ホツマツタエ秀真政傳紀 改定第二版』高島精二編、日本翻訳センター
- 松本善之助監修（2016）『ホツマツタエ発見物語』池田満編、展望社（1980年刊の『秘められた日本古代史・ホツマツタエ』などの復刻分の内容を一部含む）
- ジョージ・P・マードック（1949=1978）『社会構造 核家族の社会人類学』内藤莞爾監訳、新泉社
- 馬淵睦夫（2012）『新装版 国難の正体』ビジネス社
- 黛弘道・樋口清之他編（1979）「古代の墓誌」『図説日本文化の歴史 3 奈良』小学館
- 三上章（1960）「本居宣長の三転表」『象は鼻が長い 日本文法入門』くろしお出版
・・・（2002）『構文の研究』くろしお出版
- 三輪正胤（2017）『歌学秘伝史の研究』風間書房
- 本居宣長（1771=1970）「てにをは紐鏡」「詞の玉緒」『本居宣長全集 第五巻』筑摩書房

- ・・・・(1811=1926)「出定後語といふ文」、『増補 本居宣長全集 第八巻 『玉勝間』』吉川弘文館
- 柳田國男 (1946=2008)『新訂 先祖の話』石文社
- 山折哲雄 (1998)『霊と肉』講談社学術文庫
- ・・・・(2004)『日本の心、日本人の心(下) NHKカルチャーアワー2004/1~3月』日本放送出版協会
- 山鹿素行 (1942a)「兵法神武雄備集奥儀」『山鹿素行全集思想篇 第一巻』岩波書店
- ・・・・(1942b)「原源発機」「原源発機諺解」『山鹿素行全集思想篇 第十四巻』岩波書店
- 山崎闇斎 (1936)「垂加文集」『山崎闇斎全集 下巻』日本古典學會編、松本書店
- ・・・・(1937)「風葉集」、「風水草」『續 山崎闇斎全集 上巻』日本古典學會編、松本書店
- 山田孝雄 (1936)『國體の本義』寶文館
- ・・・・(1938=1970)『五十音図の歴史』宝文館出版
- 山本七平 (1976)『日本教徒 その開祖と現代知識人』角川書店
- 吉田兼俱 (1470=1937)『日本書紀神代抄』國民精神文化研究所
- ・・・・(成立未詳=1977)『唯一神道名法要集』『日本思想体系 19 中世神道論』岩波書店
- 吉田唯 (2018)『神代文字の思想 ホツマ文献を読み解く』平凡社
- 米村千代 (1991)「家理論の再構築へ向けて 連続と変化の視角から」『ソシオロゴス No. 15』ソシオロゴス編集委員会
- ・・・・(2011)「家族社会学における家族史・社会史研究」『家族社会学研究第 23 巻 2 号』日本家族社会学会
- A・R・ラドクリフ・ブラウン (1933=1974)「未開法」『法人類学入門』千葉正士編、弘文堂
- クロード・レヴィ=ストロース (1955=1967)「悲しき熱帯」『世界の名著 59 マリノフスキー、レヴィ=ストロース』泉靖一責任編集、川田順造訳、中央公論社
- ・・・・(1958=1972)『構造人類学』荒川幾男、生松敬三、川田順造、佐々木明、田島節夫共訳、みすず書房
- ・・・・(1947=1978)『親族の基本構造 (下)』馬淵東一、田島節夫監訳、番町書房
- 和歌森太郎 (1972a)『修験道史研究』東洋文庫、平凡社
- ・・・・(1972b)『神ごとの中の日本人』弘文堂
- 渡部昇一 (2010)「日本の歴史を奪った占領軍の教育改革」『日本の歴史第 7 戦後篇』ワック
- ・・・・(2016)「神代から続く皇統」『日本の歴史第 1 古代篇 神話の時代から』ワック
- 渡会家行 (1320=1993)「類聚神祇本源」『神道体系 論説編五 伊勢神道(上)』神道体系編纂会
- 渡会行忠 (1286=2005)「大田命訓伝(伊勢二所皇御大神御鎮座伝記)」『伊勢神道集 真福寺善本叢刊(第二期) 第八巻』国文学研究資料館編、臨川書店